

油須原駅のリニューアル

2月10日(木)、福岡県田川郡赤村にある平成ちくほう鉄道の田川線油須原駅のリニューアル式典に参加しました。この田川線(行橋～伊田)は1895年8月、近代化を目指す明治政府の掛け声に呼応して設立された豊州鉄道が豊前国8郡の交通と田川地区の石炭輸送を目的として最初に開通させた路線です。油須原駅は開業当初からある駅で、2007年に映画化されたリリー・フランキーさんの小説「東京タワー～オカンとボクと時々オトン～」でボクが旅立った駅の撮影場所になって注目を浴びました。

この路線の駅については地域連携の一環として建築学科の石垣研究室が中心となって地域特産の京築ヒノキを活用して毎年一駅ずつリニューアルしています。今回の油須原駅は由緒ある駅ですが資料が散逸していたため、過去の写真などを参考に外観を開業当時の佇まいに近づける努力や「懐かしい」をキーワードに木質の建具やレトロ調の灯具を再現するなど工夫されています。また、地域交流や観光拠点になるよう、本学が持つ最新の制震技術を内部の部屋に取り入れ安全面にも配慮がなされています。

今回のプロジェクトが特徴的なのは学内の取り組みの輪が広がったことです。建築史が専門の水野研究室が駅の実測調査に新たに加わった外、手押し車を使ったコンクリート基礎工事には工学部の土木系の学生と先生が参加しました。機械系の先生も駅で使う電力を小水力や風力、太陽光発電で賄う取り組みに着手、電気系の知見を借りてカーボンフリーの実現に挑戦しています。

行橋駅から油須原駅までは、英彦山から流れ下る今川沿いの風光明媚な田園地帯を走っており、沿線には多様な果物類に加え酒蔵や黒田官兵衛ゆかりの馬ヶ岳城址などもあります。今後、発想がやわらかな情報デザイン学科の学生なども巻き込めば、田川線沿線を全国区の観光地にできるかもしれないという「大学発の夢」が膨らんだ油須原駅のリニューアル式典でした。

正解がないことに気づく

失われた30年と言われる長い停滞を続けている日本ですがブレークスルーにつながる妙案は出てきません。長い間、欧米諸国の先進事例から正解を見つけてきた経験から、今回も正解が存在するはずと言う先入観があるのです。しかし課題先進国となった日本にはもうお手本とする正解はありません。私はこの点に気づくことが停滞から抜け出す第一歩と考えています。

残念ながら教育現場でも正解を求める知識偏重型から抜け出せていません。例えば放射線について勉強する場合、イギリスでは「あなたがロンドンからシドニーに行くまでに浴びる放射線量はどのくらいですか」と社会の中でどのように応用するか自分で考えて答えを出す問題が出されています。一方日本では「ラジウムの半減期は1600年です。今、4gのラジウムが1gになるのに何年かかりますか」といった計算問題が出され社会実装の訓練が出来ていません。

それでは正解がないと気づいた後、自分なりの答えを出すにはどうすれば良いのでしょうか？ まず課題を自分事として捉え自分で考えて答えを出す癖をつけることです。次に課題を分析する「思考の枠組み」言い換えれば、自分の専門を越えた複数の視点＝「教養」を持つことが必要です。なぜなら解決の道筋は、専門分野は勿論、言語、国籍、所属、文化など全く異なる見方をする多様な人たちとの議論を通して見つかるからです。

冒頭の「日本が停滞から脱するにはどうすれば良いか」については、異なる立場の人たちが、視点の違いに焦点を当てて議論を続けた結果、デジタル化の遅れや一極集中の解消が必要という方向性が示されました。政府はデジタル改革や地方分散型社会を打ち出しましたがなかなか前に進みません。多くの人が変化を嫌い、正解は別にあるはずという「場」の空気に流されて政策実現に向かわないからです。自ら考えて答えを出す人材育成が急がれますが、まずは正解がないことに気づくことから始まると考えています。